

感謝と希望 涙の巣立ち

大谷室蘭、海星学院高で卒業式

室蘭市内の私立2高校で4日、卒業式が行われた。早春の晴れやかな日差しの中、197人が学びやを巣立った。



涙を見せながら学びやを後にする大谷室蘭高校の女子生徒



目を潤ませ「旅立ちの日に」を歌う海星学院高校の卒業生

室蘭市八丁平の北海道大谷室蘭高校(竹本将人校長、379人)では、卒業生125人が在校生や父母らの拍手に迎えられ入場。卒業証書授与では担任教諭から一人一人の名前が呼ばれ、竹本校長から代表の島下ほかさんに卒業証書が手渡された。

竹本校長が式辞で「教用語の法語から「自分発見 自分覚悟」の言葉を引き、「どうか忙しい日常生活の中で一度立ち止まり、誰とも比べる必要のない本当の自分に出会うとともに、支えてくれている多くの命の存在に感謝してほしい」と祝福した。

卒業生を代表して窪田理央さんが女子サッカー部など学校生活の思い出を振り返り、「3年間多くの先生、友達、チームメイト、家族に支えられ自分の成長につながる答えを得た。大切な財産となりました」と答辞を述べた。最後の退場では涙を浮かべる生徒もいた。

海星学院高校(堺俊光校長、237人)の卒業生は72人。同校の前身であるカトリック室蘭女子高校時代から伝統としている黒の角帽とガウンをまとった。

昨年4月に着任した堺校長は卒業証書を一人一人に手渡しして握手。「心の中で将来への期待と不安を感じ、3年間の思い出が走馬灯のように駆け巡っていると思います。世の中を照らす星となり、社会人としてさらなる成長を期待します」と式辞を述べた。

来賓の青山剛市長らが祝辞。在校生代表の大中一弘さん(2年)が「先輩方に近づけるよう背中を追っていきます」と感謝の気持ちを伝え、卒業生代表の永谷佳子さんは「これからの道は勇気と希望を持って歩んでいきます」と決意。感情を抑えていた卒業生も最後の全校合唱「旅立ちの日に」では目を潤ませ、家族のような優しさに包まれた校舎に別れを告げた。

(有田太郎)

(栗田純樹)